

了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科における 入学時英語基礎学力と修学状況との関連：後ろ向き分析

松本揚^{1) 2)}, 越田専太郎¹⁾

¹⁾ 了徳寺大学・健康科学部整復医療・トレーナー学科

²⁾ 了徳寺学園医療専門学校

要旨

【背景】 整復医療・トレーナー学科の中途退学率は非常に高いことから、その予防対策として、中途退学者を早期に予測しうる指標の作成が必要である。

【目的】 本学科における入学時英語基礎学力とその後の修学状況との関連を明らかにすることであった。

【方法】 2011～2015年度に入学した学生を4年間で卒業した卒業群（367名）、中途退学や除籍となった中退群（83名）に群分けをし、入学直後に実施した英語プレースメントテスト（Pテスト）の得点を、Mann-WhitneyのU検定により両群間で比較した（ $\alpha=0.05$ ）。さらに、効果量（ r ）も算出した。

【結果および考察】 英語Pテスト得点の中央値〔最小-最大〕は、卒業群68〔20-98〕点、中退群60〔14-90〕点であり、卒業群において英語Pテスト得点が有意に高かった（ $z=3.86$, $P<0.001$ ）。ただし効果量は $r=0.18$ と低かった。本研究の結果は、入学直後に実施するPテストの成績は、その後の修学状況を予測する指標として妥当ではないことを示唆している。

【結論】 本学科において、入学時の基礎英語力とその後の修学状況の関連は小さい。

キーワード：柔道整復師、プレースメントテスト、基礎英語力、修学状況

Relationship between basic English skills and academic outcomes in the Department of Judo Therapy and Sports Medicine, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University : a retrospective analysis

Yo Matsumoto^{1) 2)}, Sentaro Koshida¹⁾

Department of Judo Therapy and Sports Medicine, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Ryotokuji Medical College²⁾

Abstract

Because the dropout rate has been high in the Department of Judo Therapy and Sports Medicine, we need to identify a parameter that predicts dropout risk of students for the prevention. Previous studies demonstrated that basic academic performance might be a reliable parameter to indicate the risk of dropout. However, it remains to elucidate whether basic English skills would be able to predict the academic outcomes of judo therapy school students. The objective of the study was to retrospectively compare the basic English skills evaluated by the first-year English placement test between groups of the graduate and the dropout in the Department of the Judo Therapy

and Sports Medicine, Ryotokuji University. Students who enrolled in the department between the academic years of 2011 and 2015 were divided into the graduate group (n=367) and the dropout group (n=83). The result of the English test taken before the first class was then compared between the two groups using Mann-Whitney's U test ($\alpha < 0.05$). The effect size was also calculated using r statistics. The median [min - max] score of the English placement test in the graduate group (68% [20% - 98%]) was significantly greater than that in the dropouts (60% [14% - 90%]) ($z = 3.86, P < 0.001$). Because the effect size of the comparison was small ($r = 0.18$), however, the difference may not be practically important. The present study suggests that basic English skill at the school entry does not predict the outcome of the academic career of the students in the university.

Keywords: judo therapist, placement test, basic English skills, academic outcomes

I. 背景

本学整復医療・トレーナー学科には2011年度から2015年度までに484名が入学し、うち84名（17.3%）が中途退学または除籍となっている。文部科学省¹⁾は平成24年度における全大学、大学院、短期大学および高等専門学校における退学率は2.65%と報告しており、全国平均と比較して本学科の退学者率は非常に高いことがわかる。このことから、本学科において中途退学者率を減少させることは喫緊の課題といえるだろう。

本学科では、中途退学の理由に「進路変更」を挙げた学生が最も多く49名、続いて「学業不振（学業不振による意欲低下を含む）」が41名、「経済的理由」を挙げた学生は24名であった。また、「進路変更」と「学業不振」の双方を挙げた学生は28名であったことから、「進路変更」に対して「学業不振」が関与していることが窺える。労働政策研究・研修機構²⁾は、医療系の学科が含まれる保健学部では「学業不振」による中途退学が51.2%と非常に高い値を示したことを報告している。また、公共職業安定所を訪れた専門学校中途退学者の中で全体の45.2%が医療系専門学校生であり、その中途退学理由もまた「学業不振」が43.1%と最も多かったことが報告されている。これらの報告は医療系教育課程において「学業不振」が共通した主な中途退学の理由であり、本学においても中途退学率の減少に向けて、学業不振者への対策を講じることが必要であることを示している。

本学科のカリキュラムは柔道整復学を中心とした講義で大半が構成されており、卒業要件として、国家試験合格レベルの学力が求められている。柔道整復学の学修は、解剖学、生理学などの基礎医学の理解の上に成り立っており、1年次からの継続的な学修の積み重ねが必要不可欠である。このことは入学早期の学修のつまずきが、その後の学修意欲に影響を与える可能性があること、そして中途退学率を減少させるための取り組みとして、まず学業不振リスクの高い学生を早期の段階で同定することが必要であると考えられる。

先行研究で大河内と山中は入学直後の数学プレースメントテストから、初年時に成績不良となる学生や中途退学、留年に至る学生を早期に発見できたことを報告している³⁾。また舟橋らは、入学前に実施したプレースメントテスト（国語、数学、物理3教科）の結果が、1年次の単位未取得数に影響したことを報告している⁴⁾。これらの事実は、入学時の基礎学力がその後の修学状況に関連する要因であることを示唆している。本学科においても、入学者全員に対して英語のプレースメントテストを課していることから、この結果からその後の修学状況を予測できる可能性がある。ただし、英語などの教養科目における基礎学力の評価を目的として実施するプレースメントテストの成績が、柔道整復師養成課程のように専門性の高い

カリキュラムを有する課程のその後の修学状況を予測しうるかは明らかではない。そこで本研究では、本学科における入学時英語基礎学力とその後の修学状況との関連を明らかにすることを目的とした。

本研究は、了徳寺大学生命倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：1920）。

II. 方法

対象は2011～2015年度に本学整復医療・トレーナー学科に入学した大学生450名（男子294名，女子152名）であった。留年や休学をして4年間で卒業できなかった31名，英語Pテストを受験しなかった3名は除外した。4年間で卒業した367名（男子241名，女子126名）を卒業群，中途退学や除籍となった83名（男子58名，女子25名）を中退群に群分けした。

英語Pテストは入学直後に実施している100点満点の基礎学力試験で，1年次に開講している英語授業のクラス分けに使用している。難易度は高校1・2年度で学習する程度である。さらに英語Pテストは毎年同一の問題を用いていることから，入学年度の異なる学生間の英語基礎学力の比較が可能であった。

卒業群と中退群の英語Pテストの得点をMann-WhitneyのU検定を用いて比較した（ $\alpha=0.05$ ）。さらに，効果量（ r ）も算出した。効果量（ r ）の目安は0.1-0.3を小，0.3-0.5を中，0.5以上を大とした。

III. 結果

各群の英語Pテスト得点の中央値〔最小-最大〕は，卒業群68〔20-98〕点，中退群60〔14-90〕点であった。卒業群において英語Pテスト得点が有意に高くなることが示された（ $z=3.86$ ， $P<0.001$ ）。ただし効果量は $r=0.18$ と低かった（図）。

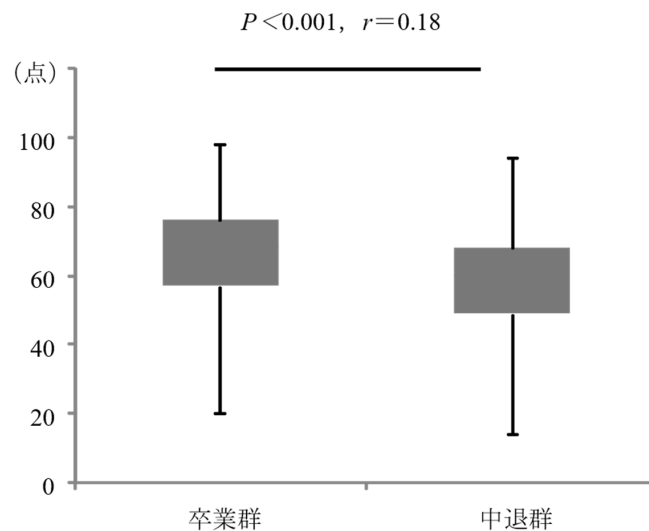


図. 英語プレイスメントテスト得点の比較
箱の大きさは得点の四分位範囲を、ひげの上下端は各々最大値、最小値を示す

IV. 考察

今回の結果，卒業群の英語プレイスメントテスト得点は，中退群と比較して有意に高くなった（ $z=3.86$ ， $P<0.001$ ）。ただし効果量は低く（ $r=0.18$ ），本研究でみられた両群の差に意味があるとはいえない。また，松本らは先行研究において，英語Pテスト得点と柔道整復師国家試験での得点の間には有意な正の相関関係がみられたものの，その相関関係は低かったことを報告している⁵⁾。英語力は一般的に中学・高校の学

習課程において修めるべき重要な基礎学力として位置づけられており、大学入学時の基礎学力を評価する指標として用いた先行研究も存在する⁶⁾。本学整復医療・トレーナー学科においてカリキュラムの主となる内容は、柔道整復学の専門科目である。本研究の結果から、これら専門的な内容を理解する力は、入学時の英語の基礎学力とは大きく関連しないことが窺えた。したがって、入学直後に実施する英語Pテストの成績は、その後の柔道整復師養成課程における修学状況を予測する指標として妥当ではないと考えられる。

大河内と山中は入学直後の数学プレースメントテストの結果から、中途退学、休学、留年に至る学生を早期に発見できることを報告しており³⁾、本研究とは異なる結果であった。これには、先行研究ではプレースメントテストと学習カリキュラムの内容が関連していたことが関係しているだろう。理系カリキュラムを有する教育課程においては、数学の基礎学力は多くの学習内容に関連したことが予想される。本学科においても、柔道整復学の根幹をなす基礎科目、例えば解剖学や生理学といった基礎科目の成績から、学生の中途退学や留年を予測できる可能性もあり、今後の研究課題となりうるだろう。

本研究の限界として、本学整復医療・トレーナー学科で中途退学に至る学生は、入学後から学ぶ高度な専門科目に学力が足りずについていけないといった学業不振の他に、進路変更や経済的理由も関連していたことが挙げられている。特に「進路変更」により中途退学する学生には、学業不振を伴わない学生もいる。このことが本研究の結果に反映した可能性は否定できない。また、本学科は柔道整復師の他に、公益財団法人日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーや中学校・高等学校保健体育教諭免許などの資格取得が可能である。これらの資格取得を目的に入学した学生では、柔道整復学の学修に対するモチベーションが維持できなかったケースもある。このような学生においても基礎学力は、その後の修学状況と関連しないと考えられる。本学科における中途退学率の減少には、そのような学生への対策も必要であろう。

V. 結論

本学科に所属した学生の入学時の英語基礎学力と、その後の修学状況との関連は小さい。したがって、英語基礎学力は、その後の修学状況を予測する指標として妥当とはいえない。

参考文献

- 1) 文部科学省：学生の中途退学や休学等の状況について、文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (2019.10.24. 8:10アクセス)
- 2) 独立行政法人労働政策研究・研修機構：大学等中退者の就労と意識に関する研究，厚生労働省ホームページ，<https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/documents/0138.pdf> (2019.10.24. 8:10アクセス)
- 3) 大河内佳浩，山中明生（2016）プレースメントテストや高校の履修状況などのデータを用いた初年時成績不振者の早期発見．日本教育工学会論文誌．40（1）.45-55.
- 4) 舟橋啓臣，加藤真弓，木村菜穂子ほか（2016）中途退学防止に向けてプレースメントテストおよび入学前教育の有用性．愛知医療学院短期大学紀要.7.1-5.
- 5) 松本揚，大澤裕行，林泰京ほか（2017）柔道整復師国家試と学内試験の関係について．了徳寺大学研究紀要.11.47-53.

- 6) 横山悟 (2016) 入学試験区分による経時的データに基づいた大学初年次学生の英語力の分析. 千葉科学大学紀要. 9. 9-16.

2019年12月5日 受理

